

# #006 お天気雑記帳

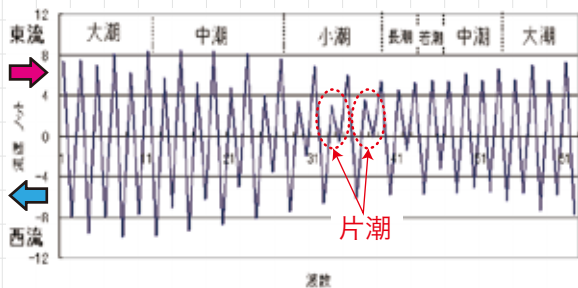
## 壇ノ浦

都を追われ、一の谷の戦い・屋島の戦いで敗れた平家は、幼い安徳天皇やその母の建礼門院たちとともに瀬戸内海を西に逃れ、関門海峡の壇ノ浦付近に集結していました。壇ノ浦の戦いは、元暦2(1185)年3月24日に行われた源平の最後の合戦です。鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』によると、源氏840艘に対し平家は500艘。源氏のほうが船の数は多いのですが、平家の船は大型で、しかも海上での戦いに慣れていたので、平家が有利であったとの見方があります。にもかかわらず、なぜ平家が敗れたのか。



最初は平家が東流(東向きの潮流)に乗って優勢に戦っていたが、その後、西流(西向きの潮流)に変わって源氏が優勢になったという説が、大正3(1914)年に発表されました。著名な歴史学者の説であったため、多くの支持を得て、一時は定説となっていました。しかし、この説の根拠となった潮流予想は間違っていて、潮流をかなり強めに推測していました。その後、潮流が弱かったという研究が発表され、潮流説は一時のような支持を得ることはなくなりましたが、広く浸透した説であるため、今でもよく紹介されます。

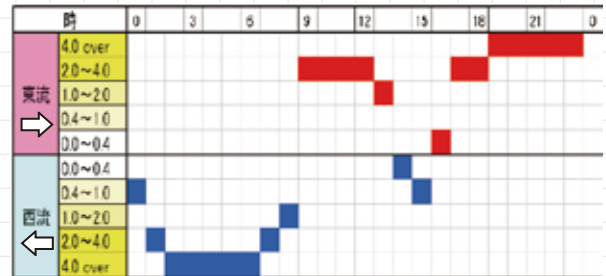
1日に2回、月・太陽の動きに合わせて、地球規模の大きな波が太平洋を東から西に向かって進みます。潮汐は、この大きな波によって海水面が緩やかに昇降する現象です。太平洋から瀬戸内海に海水が流れ込み、やや遅れて、九州をぐるりと回って日本海に海水が流れ込みます。潮が引くときも同じで、最初に瀬戸内海の海水が太平洋に流れ出し、やや遅れて、日本海の海水が太平洋に流れ出ます。干満の時間差のために、関門海峡の瀬戸内海側と日本



▲ 壇ノ浦の潮流の変化

海側で潮位(海水面の高さ)が異なり、海水面の高いところから低いところに流れることにより潮流が発生します。普通はほぼ6時間毎に東流と西流が反転するのですが、春秋の潮の干満の差が小さい小潮のときには、東流が10数時間続く「片潮」という現象が起きます。戦いがあった日は、片潮でした。

下図は、戦いの日の壇ノ浦の潮流(5段階で表示)です。未明から8時までは西流で、ピーク時には4ノット(7.4km/h)を超える強い流れになっています。9時に2~4ノットの東流に変わりました。その後、14時から16時頃はほとんど潮流が止まった状態になっています。



▲ 戦いの日の潮流

正午前後に戦いが始まりました。潮流に乗って戦うほうが有利という説がありますが、本当でしょうか。集団で行動する場合には、逆に不利になることもあります。船団は、ブレーキのない自転車の集団のようなもの。自転車の集団は、緩やかな上り坂であれば、まとまって行動できますが、下り坂だと、前の自転車にぶつかるため、距離を保ちながら行動する必要があります。船団も同じで、潮流に乗って集団で行動する場合は、船と船との距離を保つ必要があるため、陣形を維持するのは容易ではありません。魚の群れが流れに向かって泳ぐように、源氏が一団となって戦うことができたのに対し、平家が船と船との距離を保つためにバラバラになって戦ったとすれば、最前線では源氏の数の優位がさらに高まったと思われます。

距離を置いて戦っていたときは、遠方から弓を射掛ける平家が優勢。徐々に間隔が詰まって接近戦になると、陣形に勝る源氏が優位になる。平家が退却を始めるが、東流に退路を断たれて陣が乱れ、寝返るものも出て、敗北が決定的になる。そんな戦いだったのではないかと想像しています。

余談ですが、平家に追われた義経が、次々に8艘の船に跳び移り、難をのがれたという八艘飛び伝説があります。船から船に移動できたのは、源氏軍が潮流に向かって集団で行動していたからではないでしょうか。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 **松嶋 憲昭**